

説教題：ピレモンへのパウロ書簡 -オネシモの物語

鍵となる聖句：ピレモン 10 - 11 節 - 「獄中で生んだわが子オネシモのことを、あなたにお願いしたいのです。彼は、前にはあなたにとって役に立たない者でしたが、今は、あなたにとっても私にとっても、役に立つ者となっています。」

皆さん、お早うございます。皆さんと、再びお会いできて嬉しいです。数か月間、ここで、サム牧師はゲストスピーカーとして、そしてコロサイ人への書簡を通して説教シリーズをされました。今日、私はコロサイにある教会宛てに書かれたもう一つの書簡についてお話したいと思います。この教会に書かれた二番目の手紙があったことをご存知でしょうか？ 私は、ピレモンと言う名の男に使徒パウロが書いた手紙のことを言っています。コロサイの教会の人々は、ピレモンの家で会っていました。この手紙はたった一章しかありませんし、多くの人はこの手紙のことを殆ど気にも留めないと思います。皆さんが、ピレモンへの書簡の説教を最後に聞いたのはいつでしょうか？ 私がアメリカに住んでいた時 2 - 3 度この説教を聞いたのを覚えています。私は外国で暮らす 30 年間に、この書簡からの説教を聞いた覚えがありません。というのは、この手紙は、非常にしばしば見過ごされますので、今日、この手紙とその物語を皆さんと分かち合うことにしました。

この手紙の最初の 1 - 3 節を読みましょう - 「キリスト・イエスの囚人であるパウロ、および兄弟テモテから、私たちの愛する同労者ピレモンへ。また、²姉妹アピヤ、私たちの戦友アルキポ、ならびにあなたの家にある教会へ。³私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。」

この手紙の歴史的背景とコロサイの教会のことに少し時間を割きます。そして 1 節で最初に気が付くことは、パウロが彼自身をキリスト・イエスの囚人と呼んでいることです。パウロがこの手紙を書いていた時、彼は獄にいます。この手紙は、パウロが獄中で書いた「獄中書簡」の一つとして分類されます。4つの「獄中書簡」があります - それらは、エペソ人、ピリピ人、コロサイ人、そしてピレモンです。これらの手紙の夫々の中で、パウロは彼が獄中にいることを示唆しています。彼は数回、投獄されました。そして、これらの手紙を書いたのは、どの獄中時なのかははっきりとは分かりません。しかし学者たちは、ローマで囚人であった 2 年の間に書かれたのではないかと考えています。それは、使徒の

働きの終わりに記録されています。ですから、これらの手紙は、恐らく紀元 62 年頃に書かれたのでしょう。彼は、この時期、訪問客を受け入れることを許されているので、彼の忠実な同労者であるテモテがしばしば、彼と一緒にいます。パウロは、その手紙は、彼とテモテからだと言っていますが、主な手紙の書き手が、パウロだというのは明白です。この手紙の殆どの部分で、彼が人称代名詞「私」を使っているからです。

また 1 節に、この書簡が誰に宛てたものなのかも見ます。親愛なる友であり、同労者のピレモン宛です。ですから、明らかに、パウロとテモテとピレモンは、過去のある期間、福音宣教のために一緒に働いていました。

2 節では、姉妹アピヤのことが言われています。この人は、恐らくピレモンの妻と思われます。次に言われている人は、戦友と呼ばれるアルキポです。ピレモンとアピヤの息子かもしれないと思われています。しかし、彼はこの家の息子というだけではありません。

「兵士」という言葉から福音の働きにおいて重要な役割が示唆されます。それで学者の中には、コロサイにある教会の牧師あるいはリーダーであったと示唆する人もいます。コロサイ人宛ての書簡で、パウロはコロサイの教会にこのことを話しています（コロサイ 4：17） – 「アルキポに、「主にあって受けた務めを、注意してよく果たすように。」と行ってください。」アルキポはコロサイで重要なミニストリーの役割を担っていたに違いありません。そしてパウロは、教会が彼を励ますことを命じて、アルキポがそれをきちんとすることを確かめたいと望んでいます。

2 節に、この書簡がピレモンの家で行われる教会も書き加えられていることに目を留めてください。信者たちが個人の家で会うことは、初期のキリスト教では一般的でした。大抵は、皆が集まることのできる大きな家を持つ裕福な信者の家で集まりました。この手紙は、往々にして教会のホストをする男性宛ての個人的な手紙です。しかし、手紙はその教会全体で分かち合うことを予想されています。

もう一人の話を使って、歴史の紹介を続けさせてください。23 節を見ましょう。その手紙の最後に、手紙を終える時の言葉です。彼は「キリスト・イエスにあって、私とともに囚人になっているエパfrasが、あなたがたによろしくと言っています。」と書いています。エパfrasは、この時、パウロと共に獄にいます。そして彼はコロサイの教会にとって特

別な人です。というのは、彼はそこの出身だからです。コロサイ 4:12-13 を見ましょう。

– 「あなたがたの仲間のひとり、キリスト・イエスのしもべエパfrasが、あなたがたによろしくと言っています。彼はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。¹³私はあかしします。彼はあなたがたのために、またラオデキヤとヒエラポリスにいる人々のために、非常に苦勞しています。」 エパfrasは、コロサイの会衆の出身という意味の「あなたがたのひとり」と言われています。

13 節は、ラオデキヤとヒエラポリスと言う近くの町々が言及されています。パワーポイントのスクリーンで地図をお見せしましょう。現在のトルコの西部に、コロサイ、ラオデキヤ、ヒエラポリスの3つの町を見ることができます。それらは、エペソ、スミルナ、ペルガモ、そしてサルデスと並んでアジアとして知られている古代の州にあります。黙示録 2 章と 3 章でこれらの教会の幾つかを見つけることができます。エペソはこの地域の中で、きわめて重要な町で、使徒パウロは、実りある時期をそこで過ごしました。



[この地図の資料: Biblical Archaeology Society オンラインデータベース
<https://www.baslibrary.org/images/bsba4502060041.jpg>]

彼の3回目の宣教旅行の初めに、使徒パウロはエペソの町に来ました。それは紀元52年頃です。使徒19:1に、このことを見ます - 「アポロがコリントにいた間に、パウロは奥地を通過してエペソに来た。そして幾人かの弟子に出会って、」 彼が、アジアの州の内陸部

を通過した時、コロサイ、あるいは近隣の町々を通過した可能性はありますが、それが確かかどうか分かりません。

8 節に、エペソでの彼のミニストリーの初期について、このことを見ることができます。

「それから、パウロは会堂には行って、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、彼らを説得しようと努めた」

そして 10 節に「これが二年の間続いたので、アジアに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主のことばを聞いた。」2 年間、パウロと彼の同労者たちは、アジアの州にいる皆が主の言葉を聞くという、そのような効果と共にエペソで福音を広めました。

ピレモンと彼の家族が福音を聞き、喜んで受け入れたのは、恐らくこのころでした。パウロが、コロサイに旅したか、あるいはピレモンがエペソに旅したかどうか分かりませんが、彼らが、どこかの時点で会ったことは分かっています。

ピレモンへの書簡に戻りましょう。19 節の終りに、パウロがピレモンに言う箇所を見てください: 「あなたが今のようになれたのもまた、私によるのですが」ピレモンを主に導いたのはパウロ自身でした。パウロはピレモンに、ピレモンの霊的な命も永遠への道もパウロによることだと、思い起こさせたいのです。パウロは、このことをピレモンに言ったのは、パウロがピレモンに特別な願いがあるからです。特別な願いは、この手紙の核心であり、間もなく、そこに行きます。しかし、最初に、ピレモンと彼の家族、そして彼の家でなされる教会へのパウロの挨拶を続けて続きましょう。

3-7 節 - 「私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。⁴私は、祈りのうちにあなたのことを覚え、いつも私の神に感謝しています。⁵それは、主イエスに対してあなたが抱いている信仰と、すべての聖徒に対するあなたの愛とについて聞いているからです。⁶私たちの間でキリストのためになされているすべての良い行ないをよく知ることによって、あなたの信仰の交わりが生きて働くものとなりますように。⁷私はあなたの愛から多くの喜びと慰めとを受けました。それは、聖徒たちの心が、兄弟よ、あなたによって力づけられたからです。」

パウロの手紙の多くは、類似する挨拶と感謝の表現を含みます。恵みと平安-旧約聖書と新約聖書の両方の教えの2つのカギになる要素です。パウロは、彼の祈りの中にピレモンを入れていると言います - 事実、もし私たちがパウロの書簡のすべてを見るなら、彼は、いつも、彼の祈り中で多くの異なる個々人を覚えています。これは、私たちの祈りの中で、クリスチャンの兄弟や私たちが心にかける誰にでも熱心になるべきことを思い起こさせます。

5 節で、パウロは、神の民に対するピレモンの愛、そしてキリストにあるピレモンの信仰を褒めています。6 節で、彼は、ピレモンと一緒に福音を広めたことを懐かしく思い、それが主にあって分かち合うすべてのものの理解を深めることにつながるようにと祈っています。7 節で、パウロは、ピレモンから受け取った喜びと励ましに目を留め、そして、それからピレモンが、どの様にして彼のクリスチャンの仲間を元気づけたかを宣べています。

この最後の言葉は、書簡の核心部である、手紙の次の部分に移行する連結語です：パウロはピレモンにお願いしたいことがあります。続けて読みましょう。

8 - 11 節 - 「私は、あなたのなすべきことを、キリストにあって少しもはばからず命じることができるのですが、こういうわけですから、⁹むしろ愛によって、あなたにお願いしたいと思います。年老いて、今はまたキリスト・イエスの囚人となっている私パウロが、¹⁰獄中で生んだわが子オネシモのことを、あなたにお願いしたいのです。¹¹彼は、前にはあなたにとって役に立たない者でしたが、今は、あなたにとっても私にとっても、役に立つ者となっています。」

パウロは、イエス・キリストの使徒でした。そのような神に召された立場で、彼は彼の権威を断言し、ピレモンにオネシモと名付けられたこの男に関連することを実行するように命じることができました。しかしながら、9 節でパウロは、キリストの愛、アガペーの愛、つまりそれは自己犠牲の愛ですが、その愛に基づいてピレモンに強く訴えたいと願っているといます。

オネシモとは誰のことでしょうか？何故、パウロはピレモンに、それほど強く願うのでしょうか？10 節で、パウロは、この男を彼の息子と呼んでいます。 - 彼の生物学上の息子

ではなく、彼の霊的な息子です。パウロがこの男、オネシモをキリストの救いに導いたのは囚人の時でした。ところで、オネシモと言う名は、役に立つ、益をもたらすという意味です。パウロは、ピレモンにとって興味深い点を作るために、この男の名前の意味を使います。11 節で、パウロは「彼は、前にはあなたにとって役に立たない者でしたが、今は、あなたにとっても私にとっても、役に立つ者となっています。」役に立つと言う名のその男は、ピレモンにとって役に立たなくなっていました。事実、この男は、ピレモンに所有されていた奴隷でしたが、彼は逃亡奴隷でした - 彼の主人であるピレモンから逃げました。神の定めた状況を通して、ピレモンを主に導いた男パウロと、オネシモは獄中で会うことになります。そして獄中で、パウロはオネシモを主に導きました。彼の主人であるピレモンにとって役立たずになっていた奴隷がキリストにあって、新しい人になり、そして神の国のために、パウロにも役立つ者になりました - もしかしたら - 彼の以前の主人であるピレモンにとっても。

創世記の中で、ヤコブの息子ヨセフが嫉妬深い兄たちに奴隷としてエジプトに売られた話が印象に残っているのですが、それと並行して考えざるを得ません。ヤコブとその家族が飢饉に見舞われ、食糧を必要としたとき、神の計画によって救われたのである。ヨセフは、神によって定められた一連の状況を通して、奴隷から囚人になり、エジプトの食糧貯蔵所を監督する大臣になったのです。ヨセフが、後に彼自身を兄弟たちに現わした時、創世記 45 : 5 - 8 で彼は彼らにこう言いました - 「しかしわたしをここに売ったのを嘆くことも、悔むこともありません。神は命を救うために、あなたがたよりさきにわたしをつかわされたのです。⁶ この二年の間、国中にききんがあったが、なお五年の間は耕すことも刈り入れることもないでしょう。⁷ 神は、あなたがたのすえを地に残すため、また大いなる救をもつてあなたがたの命を助けるために、わたしをあなたがたよりさきにつかわされたのです。⁸ それゆえわたしをここにつかわしたのはあなたがたではなく、神です。神はわたしをパロの父とし、その全家の主とし、またエジプト全国のつかさとされました。」

そして、今コロサイから遠く離れた獄中で、パウロは、福音のために働く彼の以前の同労者、ピレモンから逃げ出した奴隷を救いに導きます。そして、かつては役立たずと思われていたこの奴隷は、新しく生まれ変わった経験をし、そして主にあって役立つ兄弟になりました。パウロは、獄中で役に立つことを証明した彼の霊的息子を愛しています。しかし、自分のそば近くに彼を置いておくよりは、パウロは彼の属する、彼の主人の家に送り返し

ます - .しかし、パウロは彼をそばに置いておくのではなく、自分の属する場所、つまり主人の家に送り返します-もはや役に立たない奴隷としてではなく、クリスチャンの兄弟として。とはいえ、その社会では、この人は奴隷であり、裕福な人の所有者であり、その所有者のもとに戻るべきなのです。

パウロは、親愛なる友であり、同労者であるピレモンに特別の願いをします。9節をもう一度ご覧ください。パウロは、ピレモンにアガペーの愛によってお願いしています。しかし、ピレモンの人間性に訴えるために、更に2つのポイントを加えます。パウロは、自分が老人である事、そして福音伝道者の故に囚人であると言っています。事実、この手紙の1節で、パウロは、あえて、自分の立場を低くして、彼自身のことをキリストの使徒（他の書簡のように）とは言っていない。マルチン・ルターはここに興味深いコメントをしています。ルターは「ピレモンに、彼の権利を放棄させるため、パウロは自分の権利を捨てています。」と言っています。ピレモンは、彼の奴隷を取り戻す権利があり、彼の奴隷を厳しく処罰する権利もありました。パウロは、ピレモンはそれらの権利を捨て、奴隷を処罰せず、かえってキリストにある兄弟として彼を迎えることを願っています。ですから、パウロがピレモンにして欲しいことを頼む時、彼は使徒としての立場を使いません - その代わりに、彼は自分の立場を捨てて、彼の今の低い立場を強調します。つまり、獄中にいる老人であることです。そしてピレモンに、クリスチャンの愛を土台にして行動し、そして自発的に憐れみを見せることを選ぶように訴えています。

この書簡の次の部分に移りましょう。12 - 16節です - 「その、オネシモを、あなたのもとに送り返します。彼は私の心そのものです。 ¹³私は、彼を私のところにとどめておき、福音のために獄中にいる間、あなたに代わって私のために仕えてもらいたいとも考えましたが、 ⁴あなたの同意なしには何一つすまいと思いました。それは、あなたがしてくれる親切は強制されてではなく、自発的でなければいけないからです。 ¹⁵彼がしばらくの間あなたから離されたのは、たぶん、あなたが彼を永久に取り戻すためであったのでしょう。 ¹⁶もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、すなわち、愛する兄弟としてです。特に私にとってそうですが、あなたにとってはなおさらのこと、肉においても主にあっても、そうではありませんか。」

オネシモはパウロにとって、とても大切です。しかしオネシモは、ピレモンとの関係は、パウロが持っているよりずっと長期間の関係がありました。ですから、もしオネシモが彼の主人のもとに帰るなら、今や彼らはクリスチャンの兄弟なので、彼らの関係は、より深くなる可能性があります。

奴隷の主人であるピレモンは、この奴隷を自由にする立場にあつたでしょう。パウロの願いことはそうではありません。しかし、そうなり得ることもあるでしょう。さらに重要な事は、彼らが今兄弟なので、彼らの奴隷と主人の関係が変えられたことです。

ガラテヤ 3 : 28 を読みましょう - 「ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあつて、一つだからです。」

そしてコロサイ 3 : 11 - 「そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。」

キリストを信じる仲間として、私たちは皆一つの間人であり、もはや人種や階級、性別の区別はありません。もちろん、人種や性別の物理的な現実が消されるわけではありませんが、私たちが主の前に立つとき、それらは考慮されることはないのです。

1 コリント 12 : 13 も見ましょう - 「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」

民族、社会的地位がどうであれ、夫々のクリスチャンは聖霊を内に持っています。

次は、少し違うものを見たいと思います。私は、この次の聖句が私たちに与える印象が好きです。ヤコブ 1 : 9 - 10 - 「貧しい境遇にある兄弟は、自分の高い身分を誇りとしなさい。¹⁰ 富んでいる人は、自分が低くされることに誇りを持ちなさい。なぜなら、富んでいる人は、草の花のように過ぎ去って行くからです。」

私はこのイメージが好きです。クリスチャンである私たちにとって、もしあなたが低い境遇から来たのなら、創造主があなたを神の子と関係を持つために高いレベルまで引き上げてくれたことを喜んでいいのです。あなたは主から大いに評価されているのです。一方、あなたが富と権力のある立場から来たのなら、宇宙の創造主と比較するとき、今のあなたは低い位置にいることを認識すべきです。たとえ、あなたが努力して富と権力を手に入れたとしても、あなたがこの世で手に入れた能力とエネルギーを与えたのは神であることを忘れてはなりません。全能の神の前に、自分が謙虚な立場にあることを認識すべきです。

もし誰かが、奴隷であるなら、自由になることを求めるべきでしょうか？ はい、もし社会の基準に沿って可能なら。しかし、あなたはそれが起きると期待すべきではありません。

1コリント 7:17-22 「ただ、おのおのが、主からいただいた分に応じ、また神がおのおのを召しになったときのままの状態です。私は、すべての教会で、このように指導しています。¹⁸ 召されたとき割礼を受けていたのなら、その跡をなくしてはいけません。また、召されたとき割礼を受けていなかったのなら、割礼を受けてはいけません。¹⁹ 割礼は取るに足らぬこと、無割礼も取るに足らぬことです。重要なのは神の命令を守ることです。²⁰ おのおの自分が召されたときの状態にとどまっていなさい。²¹ 奴隷の状態で召されたのなら、それを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、むしろ自由になりなさい。²² 奴隷も、主にあって召された者は、主に属する自由人であり、同じように、自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです。」

21 節 – 「奴隷の状態で召されたのなら、それを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、むしろ自由になりなさい。」 22 節は、先ほど読んだヤコブの聖句を思い出させます。ここで私たちに与えられている事は、クリスチャンとなった奴隷がキリストにあって自由になったことを喜ぶことです。そして自由になった人は、キリストの奴隷になったこと、彼の命は、彼自身のものではなく主のものであることを認識すべきです。

クリスチャンの奴隷は、どの様に振舞うべきでしょうか？ 1テモテ 6:1-2 で教えています。
– 「くびきの下にある奴隷は、自分の主人を十分に尊敬すべき人だと考えなさい。それは神の御名と教えとがそしられないためです。² 信者である主人を持つ人は、主人が兄弟だからといって軽く見ず、むしろ、ますますよく仕えなさい。なぜなら、その良い奉仕から益

を受けるのは信者であり、愛されている人だからです。あなたは、これらのことを教え、また勧めなさい。」

クリスチャンの奴隷が主人を尊敬することは、クリスチャンのあかしの問題です。また、クリスチャンの主人が奴隷を品行方正に扱うことも、クリスチャンの証の問題です。

オネシモとピレモンの物語はどうなったのでしょうか。それは分かりませんが、先程のテモテ1章の原則に従ったのだらうと想像できます。少なくとも、しばらくの間は、オネシモは奴隷として主人に仕え続けたことでしょう。それがいつまで続いたかは分かりませんが。

ピレモンへの書簡を続けて読みましょう。17-22節 - 「ですから、もしあなたが私を親しい友と思うなら、私を迎えるように彼を迎えてやってください。¹⁸もし彼があなたに対して損害をかけたか、負債を負っているのであれば、その請求は私にしてください。¹⁹この手紙は私の自筆です。私がそれを支払います。——あなたが今のようになれたのもまた、私によるのですが、そのことについては何も言いません。——²⁰そうです。兄弟よ。私は、主にあって、あなたから益を受けたいのです。私の心をキリストにあって、元気づけてください。²¹私はあなたの従順を確信して、あなたにこの手紙を書きました。私の言う以上のことをしてくださるあなたであると、知っているからです。²²それにまた、私の宿の用意もしておいてください。あなたがたの祈りによって、私もあなたがたのところに行けることと思っています。」

18節には、オネシモスが逃亡したとき、主人から貴重品を盗んだであろうことが記されています。そこで、パウロはここで、オネシモスが盗んだ分は自分が愛する友人であるピレモンに返済すると言っています。パウロは、自分の愛する友人であり、同労者であるピレモンが正しいことをすると確信して、この言葉を終わらせています。それどころか、パウロは自分のために客室を用意してほしいとまで言っています。実際、使徒の働き最後の2年間の獄中生活から解放されたパウロは、再びこの地を訪れたと学者たちは考えています。

書簡の最後の文を読みましょう。23-25節 - 「キリスト・イエスにあって私とともに囚人となっているエパfrasが、あなたによろしくと言っています。²⁴私の同労者たちであるマルコ、アリストアルコ、デマス、ルカからもよろしくと言っています。²⁵主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともにありますように。」

私が初めて「ピレモンへの手紙」のメッセージを聞いたとき、オネシモスが一人でピレモンの家にやってきて、使徒パウロからの手紙を手に、主人に渡すというイメージを持ちました。しかし、そのようなことはありません。もう一回、コロサイ人への手紙に戻りましょう。そこの一節をもう一回読む前に、先ほどの話をおさらいしておきましょう。獄中書簡と呼ばれる手紙は、エペソ人、ピリピ人、コロサイ人、そしてピレモンという4つの手紙あるとお話しました。ピリピという町はギリシャにあります。他の3つの書簡は、アジアの州のクリスチャンに宛てたものです。実は、エペソ人への手紙、コロサイ人への手紙、ピレモンへの手紙は、同じ旅の途中で、同じ二人の忠実な同労者によって届けられました。

コロサイ 4:7-9 を読みましょう - 「私の様子については、主にあって愛する兄弟、忠実な奉仕者、同労のしもべであるテキコが、あなたがたに一部始終を知らせるでしょう。⁸私がテキコをあなたがたのもとに送るのは、あなたがたが私たちの様子を知り、彼によって心に励ましを受けるためにほかなりません。⁹また彼は、あなたがたの仲間のひとりで、忠実な愛する兄弟オネシモといっしょに行きます。このふたりが、こちらの様子をみな知らせてくれるでしょう。」

ここに、もう一人の使徒パウロの忠実な同労者であるテキコに出会います。使徒 20 : 4 とエペソ 6 : 21 - 22 に彼のことが書かれています。彼はエペソに手紙を届け、そして今、彼はコロサイの教会とピレモンに手紙を届け、パウロと彼のミニストリーについて、口頭による報告をしています。そして、その一人とされるオネシモを伴っており、彼がコロサイ出身だと示しています。この旅の途中で、オネシモは主人であるピレモンと再会しています。

あと数分で、私のメッセージは終了します。もう一つ、皆さんにお伝えしたいことがあります。ピレモンへの書簡には、3人の主人公がいます。オネシモ、ピレモン、そしてパウ

口です。そして、この3人はそれぞれ、やりたくないことをやらなければなりませんでした。しかし、それは正しいことだったのです。

パウロは、大切に役に立つ霊的な息子オネシモを手放したくありませんでした。彼はパウロに奉仕し、役に立っていたのです。しかし、法律的には、オネシモはアジアにいる彼の所有者のものでした。彼はこの男を所有者のもとに送り届け、所有者の奉仕に戻さなければなりませんでした。

ピレモンは困難な状況に追い込まれました。地域社会で身分の高い富豪である彼が、逃亡した奴隷に寛大な態度を示せば、批判を受け、社会階層から追放される可能性があります。逃亡した奴隷には何らかの罰が必要です。もし彼が罰を免れれば、それが悪い前例となり、他の奴隷所有者の奴隷の逃亡を促すことになりかねません。しかし、オネシモは今や主にあるピレモンの兄弟であり、使徒パウロ自身から個人的に頼られました。ピレモンは相反する価値観のバランスを取るために許容できる方法を見出したと、私は確信していますが、批判も受けたに違いないでしょう。私たちが主の目に正しいことをする時、しばしば、この世から批判を受けることがあるでしょう。

そして、オネシモについて見てみましょう。彼もまた、やりたくないことをやらなければなりませんでした。彼は奴隷の地位に戻らなければなりませんでした。それが法の求めるところでした。彼は自由を楽しんでいましたが、正しいことをするために、主人のもとに戻らなければなりませんでした。この物語からわかるように、彼は本当にそうしたのです。数分前に読んだ1テモテ 6:1-2には、クリスチャンの奴隷は主人を尊敬しなさい、主人が同じ信者であるならなおさら尊敬しなさいと書かれています。これはクリスチャンの証の問題です。オネシモはきっとそうしたでしょう。

私たちは、どのような決断に直面しても、正しいことをすることを忘れないようにしましょう。私たちの主に誉れをもたらすことを行いましょう。それは難しいことかもしれませんが、最終的にはより良い良心とより良いクリスチャンの証が得られるのです。